付編　願海寺城下町の推定

古川　知明

1　問題の所在

願海寺城は、寺崎民部左衛門尉盛永とその子喜六が城主として居城した戦国時代の平城である。城跡は、呉羽山丘陵西方の射水平野中央に位置する富山市願海寺集落に所在する。呉羽山を横断して東西に延びる北陸道は、この願海寺集落に至って細かく屈曲し、「願海寺の七曲り」として知られる。明治44年地形図にはその様子がよく表れている。

寺崎氏が居城した願海寺城の位置については、これまでの研究によりおおよその位置が推定されていたが、近年の発掘調査の結果ほぼその位置が明らかになり、また周辺の試掘確認調査の成果から、願海寺城下町に関するデータが得られつつある。

このような中で、今回の発掘調査によって戦国期の遺構が確認されたことは、願海寺城下町の範囲と構造の解明に大きく寄与するものである。本稿では、過去の調査結果等を踏まえた願海寺城下町の復元を試み、今回の遺構の位置付けについて検討する。

2　願海寺城と寺崎氏

願海寺城主寺崎民部左衛門は、能登畠山臣下寺崎平左衛門行重の子とされる。その出自は不明だが、建徳３（1371）年桃井直常は寺崎備中守に高岡守山城を守らせており、寺崎氏は桃井氏の臣下であったとみられる。

その後寺崎氏が記録に登場するのは、天文11（1542）年から天正９（1581）年までである。天正11年から元亀元（1570）年頃までは神保方の武将として上杉方と対抗していたが、元亀３年には一向一揆勢に対抗して上杉方についた。天正６年謙信死去に伴い一時織田方につくが、佐々成政の越中分封に反抗して上杉方につき、天正９年織田方に攻められ落城する。

天正９年田中尚賢等連署状〔富山県 1980〕によれば、城は少なくとも「実城」と「二之廻輪」の２郭以上をもつ構造であったことがわかる。

3　これまでの調査・研究

先述の「願海寺の七曲り」は、戦国時代において軍勢の進攻を困難にする目的で構築されたという考えは、すでに明治時代の『越中遊覧志』で指摘されたところだが、ここでは佐々成政が築造したと考えられていた。実際は寺崎氏が整備した願海寺城とその城下町に関連した構築物であると認識されるものであるが、これを願海寺城とほぼ同時期に存在した石黒氏の木舟城とその城下町の分析から明らかにしたのが高岡徹氏である。高岡氏は、木舟城北側に東西に延びる北陸道（中田道）が、城下町西口付近で細かい屈折を繰り返し「小曲り」と呼ばれており、また城北側の城下町で大きく屈折する「大曲り」の存在に注目し、これらが敵が一気に急進撃して攻め込まないようにするための防御とした。「願海寺の七曲り」はこの木舟城の大曲り・小曲りと共通する性格のものであると指摘した〔高岡 2002〕。

また高岡氏は、地名・通称を手がかりに願海寺城下町の範囲を復元する研究を行った〔高岡 1975、1980、1997、2002〕。それによると、城があったと推定されるのは願海寺字舘本地内で、「舘」は居館を示す。その周囲には、町屋を示す「ナカマチ」「アラマチ」「コオリマチ」、家臣団を示す「蔵地」「ダイガク」「チゴデラ」、城の正面を示す「オモテ」、城を取り巻く湿地帯を示す「深田」「ドブケ」等が存在し、この範囲に城下町が復元されることを想定している。またこの構造は木舟城下町との類似性もみられるという。

石川旭丸氏は、記録や伝承から願海寺城史を検討した〔石川 1975・1976〕。それによると、寺崎氏が願海寺（射水郡開発村）へ移住した時期は天文６～８（1537～1539）年頃と推定され、その後約30年後、願海坊巧空が寺崎氏の居館の南に隣接して堀と城壁を巡らした願海寺を建立したが、寺崎氏はこれを焼き討ちし、その跡に城を築城したとされる。

これらの内容の根拠は明確でないが、天文６～８年から天正９年の落城まで約40年余り寺崎氏の城下が存続した可能性を示す。

また、石川氏の論考では、城の東南隅の石垣が明治まで存在していたこと、昭和６年に舘本地内で地下から砂と砂利を敷き詰めた２間×３間の鍵形の基礎跡や五輪塔が検出されたことなど興味深い記録が報告されている。

一方、平成14（2002）年度に富山市教育委員会が行った発掘調査では、願海寺字舘本地内において戦国時代の居住区・堀等の遺構と遺物が多数出土した。確認された堀は二重に巡る防御性の工夫がなされた構造で、土橋が検出されており、堀の北側に郭が存在することが明らかになっている。出土遺物には、表面に人名とみられる「多て王き」（たてわき）、裏面に攻めるの意味をもつ「王り多て」の文字が書かれた木簡、将棋駒「歩兵」、土蔵建物の壁とみられる塼（焼レンガ）、刃物痕のある木柄等があり、これらは火災に伴って堀に廃棄されたものである〔富山市教委 2003〕。かわらけの年代から火災は16世紀第３四半期前後とみられ、天正９年頃の落城記録と一致するといえる。

江戸時代の絵図のいくつかには古城跡の位置が示されているものがある。石黒信由作成「射水郡大絵図」（文化７年下書、文政10年改書）には願海寺の七曲りが南へ大きく屈曲した部分、願海寺集落の南側に城跡が示されており、発掘調査で確認された郭・堀の位置とほぼ符合しているようである。

4　願海寺城下町の復元（第23図）

これまでの研究では地名等により城下町の概略範囲が検討されたが、具体的な範囲はまだ十分に明示されていない。ここでは、明治44年発行の地形図をもとに、発掘成果及び街道の方向・地割・段差等の微地形を観察し、願海寺城と城下町の復元を試みたい。

地形図では、鉄道の敷設のため北陸道が一部変形したところを除き、旧地形を良好に遺しており、地割・微地形がよくわかる。

前述のように、北陸街道は願海寺集落東方で「七曲り」と呼ばれる幾度かの屈曲を示す。この屈曲部分を除くおおよその北陸街道の主軸方向は、南北方向に換算してN-10°～20°-Eを示す。七曲り区域に入ると、その東半部では、細かく鈍角に屈曲するのに対し、現願海寺集落付近の西半部では、ほぼ直角方向に大きく屈曲することが特色として挙げられる。この意味で七曲りの屈曲は、北陸道の方向をおよそ意識していることがわかる。

地形図をみると、この北陸道や七曲りの方向と同じまたはこれと直交する（N-15°～25°-E）地割が多く認められる。東側は、七曲りが始まる野口集落南方から野口集落内を結ぶラインである。西側はほぼ鍛冶川支流砂川のラインである。北側は野口集落と願海寺集落を結ぶラインであるが、願海寺集落東部から北方へ延びる道路地割が存在し、このラインより一部北側への広がりも予想される。南側は舘集落の南側のラインである。ここには東西方向に崖状の落込みが存在し、城あるいは城下の南限を示す堀跡の痕跡の可能性がある。このラインを囲んだ範囲、東西約１km、南北約600mが城下町エリアと推定される。

このように考えた場合、願海寺城は願海寺集落の南、城下町東西中央主軸線上に存在し、その背後に賀茂社が位置する。賀茂社の西側は鍛冶川支流砂川が控え、城の後背地を構成する。

また願海寺集落と野村集落の中間北部には、神社が鎮座する。昭和初期の道路築造の際別社に合祀

されたとみられ、神明社であった可能性が高いが現存しない（舟竹孝氏による関係者への聞取による）。この神社は城下町北限ラインのほぼ中央に所在し、願海寺城の北東方向にあって鬼門の位置を示すことから、願海寺城にとって重要な意味をもつ神社と考えられるが詳細は不明である。

このように推定した城下町エリア内においては、今回調査も含めこれまで７件の試掘確認調査が行なわれており、うち５箇所において戦国期遺構・遺物が確認されている。また高岡氏が調査した地名・名称はほぼこの範囲に含まれている。

5　今回検出遺構の性格について

今回調査で検出された溝 SD01・11・19によって囲まれるコの字形の区画は、南北約32m 強（18間、東西は約20m を確認）の方形区画であり、その主軸はおよそ N-10°-W となる。この方向は、先に推定した願海寺城下町全体の主軸方向と20° 異なる。全体としては居館的様相を示すが、これと同一軸である SD04・06が区画溝とすれば、地口９間半もしくは７間、奥行17間の短冊形敷地を形成することになり、屋敷地とも考えられる。

一方Ｌ字形の溝 SD09はほぼ南北方向を主軸とし、これと同じ方向を持つ溝には SD17・18がある。これらは SD01・11・19よりもやや規模が小さいことでも共通する。前者と後者はそれぞれ別区画の屋敷地とみられ、両者の間は10.8m（６間）離れており、道路跡の可能性がある。

以上のことから、今回調査区には①N-10°-W 方向の区画と、②ほぼ正方位の区画の２種類の区画が存在するといえる。この区画の年代は、区画溝内から出土した遺物の年代から、①が16世紀第３－４四半期、②が16世紀第２－３四半期の構築とみられ、②→①への変遷を認めることができそうである。

この２種の区画について、寺崎氏が記録上に現れる年代と比較すると、正方位をとる②の区画がほぼそれに当たるとみられる。

一方、今回調査区の南方にある字舘本地内では、これとほぼ同時期に築造したとみられる城館とその周囲の調査が行なわれており、平成14年度の木簡等が出土した堀跡等の主軸は、N-30°～50°-E を示し、これまで見てきた推定城下町や街道の方向、遺構の方向と大きく異なっている。また、そのすぐ東側の試掘でも N-40°～50°-E の区画と、ほぼ正方位の区画の２種が検出されている。

このような状況をどう理解するかについては諸説がでようが、構造が解明されている木舟城と比較して考えた場合、木舟城では全体としては方形基調であるが、細部をみると、カーブしたり主軸とは10-20° のズレをもったラインが存在していることからみて、必ずしも真四角な郭を復元する必要はないようである。実際発掘調査で検出された内堀も緩くカーブを描いており、この推定を裏付けている。また別の視点として自然地形（河川や沼等）が存在するため屋敷地の配置に制約を受けることもあるだろう。

6　おわりに

願海寺城及びその城下町については、近年の発掘調査によって次第にその姿が明らかになりつつある。しかし発掘調査はいずれも小規模なもので、全容の解明には今しばらくの時間がかかりそうである。本稿は今回の調査に際し、これまでの細かな調査の成果をまとめて城下町全体の姿を解明しようと努めたものである。試掘確認調査では、今回推定した城下町内に存在するものの、局所的には沼地で居住痕跡が確認できなかった地点も含まれており、城下周辺がかなり湿地的環境で住みにくかったことも明らかになっている。このような自然的環境という視点も含めて今後更なる解明を試みる必要があろう。

最後に、本稿を作成するにあたり、舟竹孝氏、三枝教次氏、若宮得幸氏、新湊市博物館には多大な

るご指導ご協力をいただいた。記して謝意を表します。

参考文献

石川旭丸　1975　「願海寺城攷　上」『富山史壇　61号』越中史壇会

石川旭丸　1976　「願海寺城攷　下」『富山史壇　62・63合併号』越中史壇会

奥田淳爾　1973　「天正中期越中国人の動向」『富山史壇　56・57合併号』越中史壇会

塩　照夫　1972　『富山県の歴史　越中の古城』北国出版社

高岡　徹　1975　「国人寺崎氏の本拠地―願海寺―」『富山史壇』第61号　越中史壇会

高岡　徹　1980　「願海寺城」『日本城郭大系７　新潟・富山・石川』新人物往来社

高岡　徹　1988　『越中戦国紀行』北日本新聞社出版局

高岡　徹　1997　「戦国末期の国人城下町・木舟」『砺波散村地域研究所研究紀要』第14号　砺波市立散村地域研究所

高岡　徹　2002　「戦国末期における木舟城と城下町の復元研究―国人石黒氏の盛衰と城下町の様相―」『富山県福岡町木舟城跡発掘調査報告書―範囲確認調査報告―』福岡町教育委員会

竹中邦香著・廣瀬誠校訂　1983　『越中遊覧志』言叢社

富山県　1980　『富山県史　史料編Ⅲ近世上』

富山市教育委員会　2003　『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ―水橋二杉遺跡・願海寺城跡・北代遺跡―』

古川知明　2004　「願海寺城と太田本郷城」『平成16年度富山市民大学講座市民の考古学―佐々成政と中世城館―資料』

第23図　願海寺城下町復元図（ベース図は明治44年発行迅速図）

願海寺城関係史

年　号	歴　史　事　項	備　考
	※能登畠山臣下寺崎平左衛門行重の子民部左衛門盛永	
天文６－８頃	寺崎氏射水郡開発村に移住	
天文11（1542）	盛永、放生津城を救援	神保方
天文19（1550）	寺崎泰山入道・金森斎宮が願海寺野で上杉方と戦う	神保方
天文21（1552）	盛永、井田城主飯田利忠と天神林で戦う	神保方
元亀元（1570）	盛永、神保氏春らの将として、石黒左近らとともに魚津城の上杉方を攻める	神保方
元亀３（1572）	盛永、一揆勢との戦いでの敗戦を鰺坂長実へ伝える	上杉方
天正２（1574）	盛永、能登二宮まで侵攻（畠山氏内紛に乗じて）	上杉方
天正３頃	14代了性、願海寺を小出から開発村に移転し建立	
天正４（1576）	謙信、高岡関野で遊佐信濃守、小島、鞍智、寺崎氏と戦い、これを破って能登へ向う	
天正５（1577）	上杉方将士名簿に「**寺崎民部左衛門**尉」の名が記載 盛永弟掃部政国（上杉方足軽大将）が能登黒島で討死	上杉方
天正６（1578）	３月　上杉謙信死去	
	11月　寺崎入道へ守山城に退去した能登長連龍の援助を信長が朱印状で指示	織田方
天正７頃	盛永、願海寺を焼討	
天正９（1581）	２月　佐々成政越中分封	上杉方
	５月　城下が炎上、「二之廻輪」へ小野大学助・大貝采女が織田方菅屋長頼（七尾城代）を引入れ、「実城」攻撃 盛永子喜六郎小野大学助を斬り、負傷	
	願海寺城落城	
	盛永、能登菅屋長頼の元で切腹	
	喜六郎、能登へ召寄される	
天正10（1582）	６月　盛永・喜六郎と盛永の姉の子石崎平馬、近江佐和山の丹羽長秀宅で問責	
	７月　信長の命令で佐和山にて盛永・喜六郎切腹 切腹の様子は「武勇無比　観者感嘆」 家老草野大学など５人の家臣が切腹。家老蔵地孫之進は病死	

※出典文献等は割愛した　　（古川知明作成）